



願成寺西墳之越古墳群

池田ふれあい街道に面した大津谷登山口の西あたりから東にかけて、北は大津谷公園付近までの約9ヘクタールのエリアに、多くの円墳が点在しています。その数は111基にのぼります。このように、狭い範囲に多数の古墳が集中して築かれたものを「群集墳(ぐんしゅうふん)」と呼びますが、この古墳群は岐阜県内でも最大級の規模を誇り、昭和44年に岐阜県の史跡に指定されました。築造されたのは古墳時代後期、6世紀から7世紀にかけてと考えられています。



瑞巖寺

瑞巖寺は、今から1300年前、天平の時代に行基菩薩がこの地に訪れたことを起源とします。その後、時代を経て土岐氏がこの地を守護として治めるようになりました。文和2年(1353年)6月、京の都は戦乱により混乱しており、南北朝の均衡が崩れたことで、北朝の天皇が避難する事態となりました。美濃国守護・土岐頼康は、後光厳天皇を奉じて京都から垂井を経て小島の里にある頼宮へとお迎えしました。このとき、土岐頼康以下3,000余騎が帝を護衛し、多くの公卿もこれに随行したため、村人たちは驚いたと伝えられています。



土岐頼清・頼康父子の墓

●土岐頼清

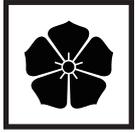
土岐頼貞の六男。足利尊氏が九州から再び京へ攻め上る際、頼清は伊予・荏原郷から湊川へ駆けつけて戦功を挙げました。その後、上洛中に陣中で病死し、揖斐郡揖斐川町の瑞巖寺にて菩提が弔われました。

●土岐頼康

若くして父・頼清の跡を継ぎ、叔父・頼遠と共に各地で戦いました。1342年(興国3年/康永元年)に頼遠が断罪された後は、第三代美濃守護を継承しました。1350年(正平5年/観応元年)の周濟房の乱では土岐一族の反乱を鎮圧し、観応の擾乱では足利尊氏・義詮に従って各地を転戦。1351年には高師泰滅亡後、尾張守護に任じられました。1353年には京都を追われた後光厳天皇を美濃・小島に迎え、北朝の京都奪還に貢献しました。その後、美濃守護として46年、尾張守護として37年、さらに二度にわたり伊勢守護として通算16年間在任。東海地方全域を治める「三国守護」として君臨しました。

幕府では「侍所所司」として全国の武士を統率する要職を担い、1354年から評定衆となり、1358年には評定の南最上座に着座。幕府の中樞を担う重鎮となりました。

文武両道の人物であり、勅撰和歌集にも多くの和歌が選ばれるなど、その人柄が偲ばれます。



二条関白 蘇生の泉

後光厳天皇の行幸の際、関白・前左大臣の二条良基は病に伏し、随行できませんでした。

しかし、病が癒えた7月27日、天皇の後を慕って旅立ちました。

良基はこの旅の様子を「小島のすさみ」に記しており、「…2、3日の道を5、6日ほど、病みながらようやく小島に到着した…」と苦難の道のを回顧しています。

酷暑と険しい道程により心身共に疲弊した良基が、小島の里を望む頃、夢うつつの中で若い娘が現れ、「これは熱病を治す冷水です。どうぞ召し上がりください」と水を差し出しました。

良基がその水を口に含んだところ、目が覚め、不思議と心が晴れやかになったといいます。

目が覚めた良基は輿を止め、「このあたりに冷水はないか」と共に尋ねました。

程なく岩間から湧き出る清水が差し出され、飲むと「この水で生き返った」と喜びました。

以後、村人たちはこの泉を「二条関白 蘇生の泉」と名付け、名泉として伝えています。



土岐頼忠並びに一族の墓

池田町の願成寺にある禅蔵寺には、土岐頼忠（応永4年・1397年没）とその子・頼益（応永21年・1414年没）の墓があります。

土岐氏は南北朝時代から美濃国守護として勢威を誇った一族で、三代目の頼康は、弟・頼雄を揖斐に、頼忠を池田に配しました。

頼忠は池田の地を拠点とし、後に第五代守護となります。

本郷に本郷城を築き、願成寺には禅蔵寺を建立しました。

その子・頼益も本郷城を継ぎましたが、後に萱津（現在の愛知県海部郡甚目寺町）を経て、革手城（岐阜市）に移り、第六代守護となりました。



小寺(池田山)城跡／稲葉家発祥の地

稲葉家の祖・稲葉塩慶は、守護・土岐成頼（饗庭氏出身）に命じられ、西美濃防衛のために池田山に城を築きました。

四国の名族・河野氏の血を引く塩慶は、この地に稲葉家を興し、本郷城の国枝氏を凌ぐ勢力を誇りました。

大永5年（1525年）の牧田合戦で、一族は多くの犠牲を出し、稲葉一鉄が家を継いで三代目城主となります。一鉄は天文3年に曾根城へ移り、これにより小寺城は廃城となりました。